

## 研 究

## 資本の破壊と貨幣・信用恐慌

竹 味 能 成

## 目 次

はじめに

## 1 資本の破壊の2形態

(1) 使用価値の破壊を伴う資本の破壊

(2) 使用価値の破壊を伴わない資本の破壊（資本価値のみの破壊）

## 2 資本の破壊の過程への貨幣・信用恐慌の作用

む す び

## は じ め に

現代資本主義下での、恐慌・産業循環の法則の現象形態における変化を解明する際に、恐慌が果たす具体的機能についての検討が重要である。恐慌の本質は、「既存の諸矛盾の一時的な暴力的な解決……攪乱された均衡を一瞬間回復する暴力的な爆発<sup>1)</sup>」であるとされる。そのような本質は、資本一般の論理次元における抽象的な性格を持った規定であり、それだけでは現代の恐慌・産業循環の分析にとっては不十分である。そこで、恐慌・産業循環の具体的過程（競争論および信用論の固有の領域）における、恐慌の果たす具体的機能についての検討が必要となる。

恐慌・産業循環の法則の現象形態の変化は、恐慌の果たす具体的機能の変化を伴っている。現代の恐慌・産業循環の分析において、自由競争下の資本主義で恐慌が果たした具体的機能をそのまま前提するわけにはいかず、その新たな内容が解明されなくてはならない。その際に、恐慌の果たす具体的機能をあらわす重要な概念の1つである、「資本の破壊」(Zerstörung von Kapital)<sup>2)</sup>という概念について検討することが有効である。

資本の破壊の過程の変化を解明するためには、資本の破壊の概念それ自体が明確とな

っていないとはならない。しかし、この概念については、マルクスの『剰余価値学説史』および『資本論』で断片的に取り上げられているにすぎず、それ以後の研究においても十分に解明されているとはいえない。そこで、本稿では、第1に、自由競争下の資本主義を前提して、資本の破壊の概念の内容について検討する。

恐慌の果たす具体的機能は、恐慌の発現過程のメカニズムと不可分である。自由競争下での周期的恐慌は、その一構成部分としての貨幣・信用恐慌を起点として発現した<sup>3)</sup>。それゆえ、恐慌の果たす具体的機能の重要な一部分は、貨幣・信用恐慌が果たす機能である。そこで、本稿では、第2に、資本の破壊の概念を貨幣・信用恐慌との関連で検討する。

- 1) Karl Marx, *Das Kapital*, Bd. III (*Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 25, 1964), S. 259. 邦訳『資本論』大月書店全集版, 第3巻, 1968年, 312—313ページ。
- 2) Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert* (*Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, a. a. O., Bd. 26, Zweiter Teil, 1967), S. 492. 邦訳『剰余価値学説史』(『マルクス=エンゲルス全集』第26巻, 第2分冊, 大月書店, 1974年), 664ページ。
- 3) この点については、以下の拙稿を参照。「貨幣・信用恐慌の発現過程における再生産と信用」『立命館経済学』第32巻第1号, 1983年。「貨幣・信用恐慌と中央銀行準備金」『立命館経済学』第33巻第5号, 1984年。

## 1 資本の破壊の2形態

### (1) 使用価値の破壊を伴う資本の破壊

資本の破壊に関するマルクスの考察は、「同じ商品のある時期における価値とその後の時期における価値との比較……はむしろ資本の流過程の根本原理をなすもの<sup>1)</sup>」という視角からなされている。「ある時期」と「その後の時期」は恐慌発生以前の時期と恐慌発生以後の時期とに対応し、恐慌によって商品の価値に生ずる変化をとらえたのが資本の破壊の概念である。

恐慌によって生ずる商品の価値の変化、すなわち資本の破壊は、さまざまな形態で現われる。それは、「資本主義的生産の『健全な』運動に対応する諸関係が回復する<sup>2)</sup>」ための、資本家間の損失の分配が行なわれることによる。そして、「この損失の分配は決して個々の個別資本に一律に行きわたるのではなく、競争戦のなかで決定されるのであ

って、この競争戦ではそれぞれ特別な利点や既得の地位に応じて損失が非常に不均等に非常にさまざまな形で分配され、そのためにある資本は遊休させられ、他のある資本は減ばされ、第三のものは単に相対的な損失を受け、またはただ一時的な減価を受ける、などということになるのである<sup>3)</sup>」。

資本の破壊は、主に2つの形態に区別することができる。第1に、現実の資本の破壊、すなわち商品の使用価値の破壊を伴う資本の破壊である。第2に、資本価値に関してのみ生ずる、使用価値の破壊を伴わない資本の破壊である。本節では、まず前者について検討する。

使用価値の破壊を伴う資本の破壊は、再生産過程の停滞の結果として生ずる。それは第1に、機械・原料・建物などの生産手段や労働力の機能の停止である。第2に、生産手段の現実の破壊（生産設備の廃棄など）や商品の腐敗である。これらは、「現存の生産条件が現実に生産条件として作用せず、活動させられないということ<sup>4)</sup>」〔傍点は原文通り〕を意味している。それによって、生産力の一部が一時的に、あるいは永久的に破壊される。こうして、使用価値の破壊を伴う資本の破壊は、支払い能力のある需要の縮小に応じて商品供給量を縮小させる役割を果たすのである。

再生産過程の停滞が生ずるのは、すでに恐慌が発生しているからである。恐慌は、支払い手段の欠乏による貨幣・信用恐慌として発生する。まず、支払い手段の獲得のための商品投げ売りによる市場価格低下を通じて、利潤率の低下が生ずる。そして、債務の支払い不能が現実に現われることによって、利潤率の低下はいっそう促進される。この過程で、蓄積拡大のテンポの低下、あるいは蓄積の停止、生産の縮小および停止が生ずる。このように再生産過程の停滞は、恐慌が流通過程のみならず、生産過程をもとらえた結果生ずるのである。

再生産過程の停滞は、恐慌からの脱出後もしばらくの間続く。この局面では、支払い手段の欠乏は一応解消され、資本の破壊は基本的に終了している。しかし、市場価格の破滅的低下によって利潤率は低下したままであり、生産活動は再開されているとはいえ、急速には拡大しない。この過程で、利潤率を高めるための資本家間の競争が展開される。それは、恐慌局面における、商品投げ売りによる支払い手段獲得のための競争とは異なって、恐慌の過程で生き残った資本家間での特別剰余価値の獲得をめぐる競争である。そのため、新生産設備の導入のための旧設備の廃棄が行なわれるが、これは恐慌の過程での、使用価値の破壊を伴う資本の破壊とは区別される必要がある。

高木彰氏は、新生産設備導入のための旧設備の廃棄を、使用価値の破壊を伴う資本の破壊としてとらえられている。高木氏は「市場利潤率が平均利潤率以下の水準にまで低下すると、資本は旧来の価値水準を維持するだけのためにも利潤量の増加を図らざるをえないのであり、生産性の上昇の強制が強力に作用することになる。個々の資本の生産性の上昇が最も急速におこなわれるのは、産業循環のこの局面においてである<sup>5)</sup>」とされ、「恐慌の初期に'惹起される資本価値の破壊は……『資本の物質的実体』にまでも及ぶものとしての資本の使用価値破壊なのである<sup>6)</sup>」と言われる。

資本の過剰の顕在化は支払い手段の欠乏という形態をとるのであり、そうした支払い手段の欠乏の結果として、弱小資本の遊休、没落が生ずるのである。それは、恐慌がすでに生産過程をとらえていることを意味する。没落を免れようとする大資本にとってもそれは例外ではなく、利潤率の低下が生ずるのは、支払い手段獲得のための競争が商品の投げ売りという形態で行なわれ、その結果、商品の市場価格の低下が生じているためである。そのような局面では、利潤率が低下したとしても、利潤が得られる限り生産設備の遊休、廃棄は行なわれない。また、たとえ利潤の得られなくなった設備が廃棄されたとしても、支払い手段の欠乏が生じているもとでは、それに代わる新生産設備の導入という形態での競争は行ないえないのである<sup>7)</sup>。

新生産設備の導入のための旧設備の廃棄は、恐慌脱出後の不況期に行なわれる。それは生産力の単なる破壊ではなく、むしろその拡大の方向に作用する。したがって、それは恐慌の果たす具体的機能としての資本の破壊とは区別されなくてはならない。とはいえ、恐慌の過程での資本の破壊としての生産設備の廃棄は、不況期における新生産設備導入を促進する要因となるのではあるが<sup>8)</sup>。

高木氏は、市場条件がさらに悪化する「資本の過剰の第二段階」において、大資本の資本蓄積の停止が生ずると言われる。「生産財のみならず消費財についての蓄積需要が全面的にストップするならば、弱小資本の遊休のために供給能力の減退が生じているとはいえ、供給過剰の傾向は一層拍車をかけられることになり、市場価格の急落は不可避となる。かくて、市場利潤率が急落し、利潤量の絶対的減少にまでいたるといふ資本の過剰の第二段階においては、大部分の範囲での資本の遊休、または破滅が不可避となる<sup>9)</sup>」。

上述のように、「資本の過剰の顕在化する時期」にはすでに市場価格の低下が生じ、それによって利潤率の低下が生じているのであり、大資本にとっての資本蓄積の停止、

資本の遊休は、それに先立つ弱小資本の遊休とまったく同じ性格のものである。ここで重要な問題は、高木氏が「その段階で生じる資本の遊休化は、資本の物質的実体まで及ぶ使用価値破壊を伴うものではなく、……資本の遊休化によっても、資本価値は単に減価するのみである<sup>10)</sup>」と言われる点である。

資本の遊休や破壊が資本の物質的実体に及ぶというのは、「生産手段の一部分は、固定資本であろうと流動資本であろうと、機能しなくなり、資本として作用しなくなる<sup>11)</sup>」ということである。したがって、生産設備の廃棄が行なわれないその単なる遊休であっても、その機能の停止によって、使用価値の破壊を伴う資本の破壊が生じているのである。そして、それによって生産力の一時的な破壊が行なわれ、商品供給量の縮小が生ずる。これは総資本全体にとって、恐慌を引き起こす矛盾を一時的に解決するという役割を果たす。

高木氏の言われる資本価値の減価は、資本の遊休によって直接生じるものとはいえない。資本が機能しているかいないかにかかわらず、資本価値の減価は生じるのであり、それは、商品の市場価格の低下に基づいている。そこで、この問題については、次に、使用価値の破壊を伴わない資本の破壊について検討する必要がある。

- 1) *Theorien*, Zweiter Teil, a. a. O., S. 495-496. 邦訳, 第2分冊, 前掲, 668ページ。
- 2) *Das Kapital*, Bd. III, a. a. O., S. 263. 邦訳, 第3巻, 前掲, 317ページ。
- 3) *Ebd.*, S. 264. 同上, 318ページ。
- 4) *Theorien*, Zweiter Teil, a. a. O., S. 496. 邦訳, 第2分冊, 前掲, 669ページ。
- 5) 高木彰「資本の過剰と資本の価値破壊」『岡山大学経済学会雑誌』第14巻, 第3・4号, 1983年, 264ページ。
- 6) 同上, 265ページ。
- 7) 置塩信雄氏も、資本の破壊を、恐慌の過程における新生産方法導入のための旧設備の廃棄ととらえておられる。「下降局面では、搾取率の下落によって、労働生産性の低い生産技術を体化した生産能力は資本として機能しなくなる＝資本破壊。そして、資本家は没落か新生産方法への移行かを強要される。」(置塩信雄『蓄積論』筑摩書房, 1976年, 251ページ。)
- 8) 「恐慌は、過剰生産能力・過剰資本を破壊・縮小する過程で劣等な生産設備の廃棄・消滅を促していく。さらに重要な作用として、恐慌の後における低価格、低利潤率、諸資本間の激しい競争を通じ、『特別剰余価値・利潤』を得るための新生産方法の導入、平均以上の利潤を得るための新生産物の開拓を強力に促進する作用をはたす。」(井村喜代子『恐慌・産業循環の理論』有斐閣, 1973年, 317ページ。)
- 9) 高木彰, 前掲論文, 266ページ。
- 10) 同上, 267ページ。
- 11) *Das Kapital*, Bd. III, a. a. O., S. 264. 邦訳, 第3巻, 前掲, 318ページ。また、『資本論』

では、このことに関連して、「この場合には機能の停止のためにもっとずっとひどく生産手段の現実の破壊が起きるのであろう。とはいえ、この方面から見ての主要な影響は、これらの生産手段が生産手段として働かなくなるということ、生産手段としての機能の長短の期間にわたる破壊であろう」〔傍点は筆者〕(Ebd., S.264. 同上, 318ページ)と述べられている。ここでは、使用価値の破壊を伴う資本の破壊として、生産手段の廃棄よりもその機能の停止の方が重視されている。

## (2) 使用価値の破壊を伴わない資本の破壊（資本価値のみの破壊）

使用価値の破壊を伴わない資本の破壊は、恐慌の過程で、特に重要な役割を果たす<sup>1)</sup>。それは、「価値量の減価を意味し、これはその価値量がのちに再び資本としてその再生産過程を同じ規模で更新することを妨げる」〔傍点は原文通り〕<sup>2)</sup>ことである。その結果、債務の支払いが行なえない資本家は破産し、そうでなくとも、同じ規模での生産活動が行なえなくなる。債務の支払い不能による破産は、その限りで債務を精算し、支払い手段の欠乏を解消する役割を果たす。他方、恐慌の過程で生き残った資本家にとっては、使用価値が破壊されない価値量の減価は、「一方の者が失うものを、他方の者が手に入れる」ことによって、恐慌後の再生産を促進する役割を果たす<sup>3)</sup>。

使用価値の破壊を伴わない資本の破壊の一つの重要な形態は、商品の市場価格の破滅的低下である。それは、支払い手段の獲得のための商品投げ売りによる販売競争の結果生ずる。それによって利潤率の低下が生じ、これに耐えられず、債務の支払い不能に陥った弱小資本は破産する。こうして、市場価格の低下という形態での資本の破壊は、その原因となった支払い手段の欠乏を、それによって解消する役割を果たすのである。

ところで市場価格の低下を、単に資本の破壊（資本価値の破壊）とすることには、杉野園明氏による次のような批判がある。「長期的にみたばあいには、市場価格の低落によって生じた資本の減価は、それと同じように市場価格の上昇にともなって生じる資本の増価によって相殺される……したがって、一時的な需給関係のアンバランスから生じてくる資本の減価は、市場価格が一時的に低落していることから生じたものであり、そこでは資本価値の破壊が生じたかどうかは論じえないのである。つまり、商品価値に変動がないかぎり、市場価格はふたたび上昇し、資本の増価がみこまれるからである。」<sup>4)</sup>

市場価格の単なる低下をもって資本の破壊ということができないのは、それが恐慌の過程で果たす役割との関連が不明確だからである。市場価格の低下が資本の破壊として現われるのは、恐慌の過程で、それによって利潤の低下が生じ、弱小資本における債務

の支払い不能、破産を引き起こす場合である。杉野氏は、このような場合でも、恐慌の後に市場価格の上昇が始まれば、恐慌の過程での市場価格低下を相殺することになることを指摘される。しかし、それは恐慌の過程で生き残った資本家についてのみにいえることである。市場価格低下による一部の弱小資本における債務の支払い不能・破産は、市場価格上昇によって相殺されるような性質のものではない。

また、生き残った資本家においても、市場価格の低下をその上昇が平等に相殺するわけではない。低下した市場価格で商品を販売した資本家と、逆にそれを購入した資本家とでは全く相反する利害関係が生ずる。市場価格の低下は、資本家間の競争関係を通じて個々の資本家に異なった影響を及ぼしており、したがって、市場価格の上昇による相殺においても、不平等が生じてくるのである。

杉野氏は、市場価格の低下が利潤率を引き下げ、生産条件の劣等な資本の商品が市場から引き上げられることにより、商品の平均価値が低下するが、それは「新しい市場価値が成立してくる市場条件」を示すものであり、これが現実化するかどうかという点を重視される。「こうした市場競争の結果として一時的にあらわれてくる市場価値の低下と、生産性増大にもとづく市場価値の実質的低下とのちがいを明確にする必要がある。」<sup>5)</sup>そして、この視点から、「市場価格が低下しても平均利潤がえられるように、あるいは同じことだが、資本の減価を防ぐために、諸資本は費用価格を低下させ、結果としてこの生産部門の商品価値は低下するのである。この市場価値の低下は、以前に生産された商品の価値を決定的に破壊するのである。つまり、ここで生じてきた商品（資本）価値の破壊は、需給関係という流通過程での資本の減価が、生産過程へと作用して生じたものである」と言われる。<sup>6)</sup>

ここで、資本価値の破壊としてとらえられているのは生産性増大に基づく商品の市場価値の低下であるが、それは主として、恐慌からの脱出後の不況期に生ずる。恐慌の過程での市場価値の低下は、市場価格の低下と比較してその程度は小さく、利潤率の低下を有効に阻止するとはいえない。恐慌の過程で果たす役割としては、市場価値の低下によるものよりも、上述のような市場価格の低下によるもののほうが大きいといえる。

恐慌からの脱出後の不況期においては、新生産設備導入のための旧設備の廃棄が行なわれ、生産性の上昇が急速に進み、その結果、市場価値の大幅な低下が生ずる。これは、市場価格が低下しているもとの、利潤率を高めるための競争の手段として大きな役割を果たす。したがって、それは恐慌の結果生じたことではあっても、恐慌の過程にお

いて資本の破壊が果たす役割とは区別されなくてはならない。<sup>7)</sup>

使用価値の破壊を伴わない資本の破壊のさらに重要な形態は、(商業)手形の不渡り、すなわち債務の支払い不能それ自体である。<sup>8)</sup>手形は、すでに譲渡された商品の価格がまだ最終的に実現されていないことを表わしており、手形の不渡りは、その商品の販売が結果的に行なわれなかったことを意味している。この場合、資本の破壊は手形の受取人(債務の支払いを受ける側)の方に生ずる。手形の不渡りは、手形の支払い人にとっては破産を意味し、受取人の方は破産した企業の債権者となるが、資産処分などによってもその債権の額を完全に回収することはできない。(受取)手形の不渡りの発生は利潤率を激しく低下させ、弱小資本の債務の支払い不能・破産を連鎖的に引き起こしていく。これが貨幣・信用恐慌の過程である。

古川正紀氏は、こうした破産それ自体が資本の破壊であるととらえておられる。「資本破壊の、または価値破壊のもっとも激しく典型的な形態は企業の破産であり、倒産である。この場合の企業＝個別資本は縮小再生産も単純再生産も行なうことができず、生き残った別の資本に吸収されたり、文字どおり破壊され破棄される。<sup>9)</sup>」

手形の不渡りによって破産が生ずるのは、手形の支払い人の方であり、破産それ自体は資本の破壊とはいえない。資本の破壊は、破産を生ずる原因(商品の市場価格の低下、[受取]手形の不渡り)や、その結果(生産手段の遊休、および廃棄)において現われるのである。

使用価値の破壊を伴わない資本の破壊は、その他のさまざまな形態でも生ずる。そして、それを通じて、「一方の者が失うものを他方の者が手にいれる」過程が展開される。

(固定)資本価値の減価が生ずるのは、恐慌の過程における市場価格の低下の結果である。固定資本の場合には、生産物としての固定資本についてだけではなく、すでに機能している固定資本についても、市場価格の低下の影響が及ぶのである。これは、生産性の上昇に基づく既存資本の減価とは異なる。生産性の上昇に基づく既存資本の減価は、主に不況期の新生産設備導入による既存設備の道徳的磨損の発生に基づいている。

このような恐慌の過程における固定資本の減価は、それを充用する資本家に対しては損失をもたらすが、それによって生産された生産物を購入する資本家に対しては、利潤率を高める要因として作用する。また、恐慌の過程で破産した企業が行なう資産の処分においても、恐慌の過程での固定資本の減価が作用を及ぼす。それは通常その資産の買

い手にとって有利な条件で処分され、資本の集中を促進する要因となる。さらに、恐慌の過程での固定資本の減価によって、不況期における新生産設備の導入が促進される。

国債や株式などの架空資本についても、資本の破壊が生ずる。「資本価値のうち、単に剰余価値または利潤の将来の分け前に対する手形 (Anweisungen) という形で存在するだけの部分、事実上は生産引き当てのいろいろな形の債務証書でしかないものは、それが当てこんでいる収入の減少とともにたちまち減価を受ける。」<sup>10)</sup>それは、これら有価証券の価格の下落であるが、「それは単に一方の人の手から他方の人の手への富の移転にすぎない」<sup>11)</sup>のである。これを通じて、資本の集中はいっそう促進される。

恐慌の過程では、支払い手段の欠乏が一般的に生ずる。資本家は獲得した貨幣の一部分を退蔵し、それは資本として機能しない。これも資本の破壊の一形態である。貨幣の退蔵は、恐慌の過程における支払い手段の欠乏をいっそう激化させる結果をもたらす。そして、不況期には利潤率が上昇しないため、この退蔵された貨幣が資本としての機能を再開するのは遅れ、「資本の過多」(Plethora)を形成し、利率低下の要因となる。

- 1) 「主要な破壊、しかも最も急激な性質のものは、価値属性をもつかぎりでの資本に関して、資本価値に関して、生ずるであろう。」〔傍点は原文通り〕(*Das Kapital*, Bd. III, a. a. O., S. 264. 邦訳, 第3巻, 前掲, 318ページ)。
- 2) *Theorien*, Zweiter Teil, a. a. O., S. 496. 邦訳, 第2分冊, 前掲, 669ページ。
- 3) *Ebd.*, S. 496. 同上, 669ページ。
- 4) 杉野園明「諸資本の競争と資本破壊」(高木幸二郎編『再生産と産業循環』ミネルヴァ書房, 1973年, 所収), 144ページ。
- 5) 同上, 148ページ。
- 6) 同上, 150ページ。
- 7) なお、高木氏は、杉野氏が費用価格の低下を市場価値の低下であるとされていることに対して、「市場価値水準の変化が問題になるのは、産業循環の一周期の全体を通してのことであり、特定の局面において確定されるものではない」(高木彰, 前掲論文, 265ページ)と批判されている。市場調整的生産価格としてとらえた場合の市場価値は、確かに循環の一周期全体を通じて形成されるが、市場価値水準の規定要因を問題にする際には、循環の個々の局面における諸要因の検討が必要になる。
- 8) 「そのうえに、一定の前提された価格関係が再生産過程の条件となっており、したがって再生産過程は一般的な価格低落によって停滞と混乱とにおちいるということが加わる。この攪乱や停滞は資本の発展と同時に生じてあの前提された価格関係にもとづいている支払手段としての貨幣の機能を麻痺させ、一定の期限の支払義務の連鎖をあちこちで中断し、こうして資本と同時に発展した信用制度の崩壊が生ずることによってさらに激化され、このようにして、激烈な急性的恐慌、突然のむりやりの減価、そして再生産過程の現実の停滞と攪乱、

- したがってまた再生産の現実の減少をひき起こすのである。」(Das Kapital, Bd. III, a. a. O., S. 264. 邦訳, 第3巻, 前掲, 319ページ。)
- 9) 古川正紀「価格の運動と産業循環」(高木幸二郎編, 前掲書, 所収), 134ページ。
- 10) Das Kapital, Bd. III, a. a. O., S. 264. 邦訳, 第3巻, 前掲, 318ページ。
- 11) Theorien, Zweiter Teil, a. a. O., S. 497. 邦訳, 第2分冊, 前掲, 670ページ。

## 2 資本の破壊の過程への貨幣・信用恐慌の作用

周期的恐慌の一構成部分である貨幣・信用恐慌は、直接的に資本の破壊の過程をなしている。それは、使用価値の破壊を伴わない資本の破壊としての、債務の支払い不能である。この場合、資本家間での取り引きにおける(商業)手形の不渡りと同時に、手形割引を通じてその取り引きを代位する銀行に対する返済不能という形態で生ずる。その結果、企業の破産を通じて債務の精算が行なわれ、それらによって支払い手段の欠乏が解消されることになる。この過程は銀行業の領域においても作用を及ぼし、銀行の破産が生ずる。これらを通じて、過剰生産・過剰資本と結びついていた過剰信用が解消される。

松井安信氏は、貨幣・信用恐慌が過剰信用の解消をもたらす、資本の破壊の過程をなすことを指摘されているが、その際に、信用恐慌が産業恐慌の原因だとする理論を批判されている。「利子率上昇の本質的要因は、貸付資本の需給が異常に不均衡になるほどの貸されすぎ=過剰信用と、借りすぎ=過剰蓄積、その結果資本制再生産の拡大均衡の枠を突破した過剰生産と部門間の不均衡、生産と消費の矛盾にあった。残された唯一の解決方法は、新市場価値ないし生産価格での均衡回復をはかるため名目化した旧資本価値を破壊ないしは減価する<sup>1)</sup>がいけない。その第一歩が流通過程で開始され、第二歩が信用恐慌において遂行される。膨大な信用貨幣は旧資本価値やすべての名目的な空資本を代表するものであった。かくして、これらの破棄と精算の過程が信用恐慌であり、このいみからも信用恐慌の外観にとらわれて因果を転倒することの誤りが論証されるであろう。」

貨幣・信用恐慌による過剰信用の解消がもたらす旧資本価値の破壊とは、「資本制再生産の特有のメカニズムによって、すでに矛盾解決の客観的指標として形成され新価値ないし生産価格水準の規定要因に理論的には予定されているであろう資本構成の高い資本を目安として、名目化した旧資本価値の破壊、いわゆる価値革命が行なわれる<sup>2)</sup>」こと

である。その際、松井氏は新価値水準の形成が繁栄局面で生じるものとされている。「利率が上昇に転じはじめるのは繁栄局面であって……この局面ですでに潜在的にはあるが再生産の内部では価値革命の条件が形成されつつあった。」<sup>3)</sup>

市場価値の低下は、主として新生産方法の導入によってもたらされる。それは、繁栄局面でも行なわれるが、その最も強い動機が生じるのは恐慌からの脱出後の不況期においてである。不況期に生ずる市場価値の低下にもかかわらず、繁栄局面ではこの市場価値の水準を上回って市場価格が上昇する。松井氏は、この過程で旧資本価値が名目化するものととらえ、その名目化した旧資本価値額が信用恐慌によって破壊されるとしている。

これによって、市場価格は新価値水準に引きつけられるものとされているが、それは市場価格の低下として現われるはずである。しかし、貨幣・信用恐慌における債務の支払い不能は、資本価値を破壊するものではあっても、市場価格の低下を直接もたらすわけではない。市場価格の低下は、支払い手段の獲得のための商品投げ売りによる販売競争の結果生じ、それによって利潤率が低下するために債務の支払い不能が生ずる。貨幣・信用恐慌は、このような過程が累積的に生ずる中において、資本の破壊の一形態としての市場価格の低下を促進する作用を果たすのである。

市場価格が新価値水準に引きつけられる場合に、市場価格は新価値水準と一致する点まで低下するわけではない。市場価値または市場調整的生産価格は、市場価格変動の重心をなしているのであって、恐慌の過程においては市場価格は市場価値よりも低下しているのである。このような市場価格の激しい低下は、貨幣・信用恐慌の累積的な作用の結果生じたものにほかならない。

松井氏は、信用恐慌が流通過程での契機によって生ずるとされている。「信用恐慌はまず流通過程で実現の困難と現実資本の還流の遅延ないし困難を契機に表面化してくる。」<sup>4)</sup> 実現の困難や現実資本の還流の遅延が生ずるとすれば、それはまず支払い手段の欠乏という形態で生ずる。それは、「貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積との不一致」の拡大という資本蓄積の特有なメカニズムを基礎に、利率の上昇として信用部面において現われるのである。そして、債務の支払い不能は、この信用部面において現われた矛盾が流通過程で現実化したものにほかならない。そして同時に、それによって支払い手段の欠乏が解消され、貨幣・信用恐慌を引き起こした重要な要因の1つが取り除かれることとなるのである。

貨幣・信用恐慌は、債務の支払い不能を累積的に生じさせることにより、市場価格の激しい低下をもたらすだけでなく、消費需要の急激な縮小をもたらす。企業の破産による失業の増大によって、賃金総額が減少し、労働者の消費需要が縮小するのである。このことは資本家間の販売競争をいっそう激化させ、市場価格のいっそうの低下とそれによる利潤率のいっそうの低下を引き起こす。そしてまた、それは資本（生産手段）の遊休を促進し、あるいはその廃棄が行なわれる。資本の遊休は、縮小した消費需要に対応して商品供給量を減少させる。貨幣・信用恐慌は、この資本の遊休と廃棄という形態での資本の破壊を促進することによって、それ自身の要因を取り除くことになるのである。

貨幣・信用恐慌の作用は不況の過程にも影響を及ぼす。恐慌の過程での資本の破壊が債務の支払い不能、破産という形態で行なわれることにより、支払い手段の欠乏は一応解消されている。それゆえ、債務の支払い不能が累積的に生ずることはない。しかし、生産の拡大は急速には進まない。それは、資本の破壊の過程への貨幣・信用恐慌の作用が依然として残っているためである。

企業の破産による失業の増大のために、労働者の消費需要は縮小したままである。したがって、市場価格も低下したままであり、利潤率も上昇しないので、資本の遊休は長期化する。とはいえ、それ以上に消費需要が縮小することもなく市場価格や利潤率が低下することもない。したがって、ここで生じている資本の遊休は、供給過剰に対応する供給量の縮小ではなく、商品の需給関係がその状態で均衡していることを意味する。この資本の遊休は、それによって利潤を獲得しえないという意味で資本の過剰を表わしているが、それは恐慌の過程における資本の破壊としての資本の遊休とは異なっている。

商品在庫の減少とともに、やがて生産が徐々に拡大してゆく。この時、商品の販売量を拡大して利潤率を高めるために、再び資本家間の競争が展開される。それは商品販売量拡大のための価格をめぐる競争であるが、恐慌の過程におけるような商品投げ売りによる競争ではなく、新生産設備の導入による、費用価格の低下を通じての価格引き下げ競争である。

こうした競争は、債務の支払い不能という形態での資本の破壊の結果、支払手段不足が一応解消されているために可能なのである。また固定資本の減価という形態での資本の破壊がこれを促進する。その結果生ずる市場価格の低下は、同時に費用価格の低下を伴っているために、利潤率の低下を生ずることはない。むしろ、それは特別剰余価値を

獲得して利潤率をいっそう高める結果をもたらす。

費用価格の低下に基づく市場価格の低下は、市場価値の急速な低下を伴っている。貨幣・信用恐慌の作用によって市場価格が激しく低下するために、利潤率は容易には上昇せず、そのため、遊休資本の機能の再開による生産の拡大は進まない。そこで、生産性の上昇に基づく市場価値の低下によって、このような条件のもとでも利潤率が高められるメカニズムが働くのである。貨幣・信用恐慌は、債務の支払い不能、破産という特有の形態の資本の破壊を累積的に生ずることにより、再生産過程を過度に収縮させる。そして、市場価格を過度に低下させたもとで、再生産の均衡の回復をもたらす。このような利潤条件に適合するために、市場価値の低下が強制されることになる。

新生産設備の導入は生産手段に対する大きな需要をつくりだし、やがて消費需要をも拡大し、生産の拡大を急速に促進してゆく。それによって、新しい再生産条件の形成のもとで、資本の蓄積が進展していくことになる。

貨幣・信用恐慌は、自由競争下の資本主義に特有な形態での資本の破壊をもたらし、またそのことによって、不況期における特有なしかたでの生産の回復をもたらした。それは、資本の破壊の累積的過程の作用によるものである。このような特有の作用は、自由競争下の資本主義の貨幣・信用制度、すなわち兌換銀行券制度とのかかわりを持っている。兌換銀行券制度のもとでは、再生産過程における矛盾がまず信用部に現われ、支払い手段の欠乏を生ずるのであり、このことが貨幣・信用恐慌を引き起こすと同時に、それによる特有な形態での資本の破壊の累積的過程をもたらすのである。

- 1) 松井安信『マルクス信用論と金融政策』ミネルヴァ書房、1973年、32ページ。
- 2) 同上、30ページ。
- 3) 同上、31ページ。
- 4) 同上、31ページ。

## む す び

自由競争下の資本主義において現われた資本の破壊は、現代資本主義のもとでのその発現の条件に変化が生じている。その結果、自由競争下で見られた資本の破壊の諸形態も大きく変化している。その最も大きな特長の1つは、かつてのような貨幣・信用恐慌が見られなくなったことであり、そのことによって、恐慌の機能に大きな変化が生じて

いる。

貨幣・信用恐慌は、支払い手段の欠乏による債務の支払い不能、破産を累積的に引き起こした。現代資本主義下においては、少なくとも独占企業は一部の例外を除いて、支払い不能、破産に陥ることはなくなっている。このような形態での資本の破壊は、主として非独占企業で生じているが、独占企業での支払い不能、破産が生じなくなったことの結果として、非独占企業が連鎖的に支払い不能、破産に陥る危険性は小さくなっている。他方、非独占企業は独占企業の支配、収奪を受ける結果、特有な矛盾を抱えている。

貨幣・信用恐慌がみられなくなったことより、独占企業の破産による失業の増大も生じなくなり、その限りで消費需要の縮小も資本の遊休も生じなくなった。しかし、独占的支配に基づく特有な消費需要の縮小が生じるようになり、企業は操業度調整という形態での資本の遊休を行なわざるをえず、これによる失業が生じるようになった。

支払い手段の欠乏や消費需要の縮小が生じなくなったことにより、市場価格の低下の累積的過程も生じなくなった。独占資本間では独占価格が形成され、非独占資本においても、インフレーションによって商品価格は上昇し続けている。このインフレーションは、貨幣・信用恐慌が見られなくなった代わりに現われるようになったものであり、資本蓄積過程で形成される矛盾は、自由競争下の恐慌における資本の破壊とは異なった他の形態をとって発現しているのである。

このような資本の破壊の形態における変化をもたらしたのは、独占的支配ならびに金融資本の支配の成立にあり、その変化の要因は独占的蓄積様式の検討によって解明されなくてはならない。さらに、それと関連して、貨幣・信用制度における不換銀行券制度への移行がこの独占的蓄積様式にもたらした作用が検討されなくてはならない。

(1987. 3. 20)